

第4章

doi: 10.18999/bulsea.63.77

成果と課題、成果の普及

三小田 博 昭

1 研究開発の成果

SGH研究開発2年次である平成28年度は、以下の取組を重点的に行い、SGH指定3年目の中間評価を受けた。

- ①興味関心の育成「課題探究Ⅰ」と仮説検証型課題研究「課題探究Ⅱ」
- ②国際的素養を身につける「協同的探究学習」
- ③グローバル拠点の効果的な活用法「国内グローバル拠点」
- ④グローバル拠点の効果的な活用法「海外グローバル拠点」
- ⑤英語による思考力・表現力を育成するALEの実践
- ⑥検証評価に関する実践

中間評価では、「優れた取組状況であり、研究開発のねらいの達成が見込まれ、更なる発展が期待される。」という最高段階の評価を受けた。取組みの中で評価をいただいた点は、以下の3点である。

- 北米拠点、アジア拠点を開拓し、積極的に交流を計画・実施しており、テレビ会議システムを活用してモンゴルの学校との交流を行うなど、教育環境を国際化している点が極めて高く評価できる。
- 生徒の意識調査からも狙いとする「深い理解」「判断力・有用な情報収集」などの力の伸長が見られる。それぞれの仮説について、アンケート調査に基づいた数量的な分析がなされており、成果が報告されている点が極めて高く評価できる。
- 学校全体で「協働的探究学習」を取り入れた授業改善に取り組み、結果を活用しながら研究開発内容の改善を図りつつ進めている点が非常に優れている。

この結果は、名古屋大学のホームページにも掲載され、マスコミにも取上げられた。



29年度は、SGHプログラム評価に関わる事項として以下のものを実施した。

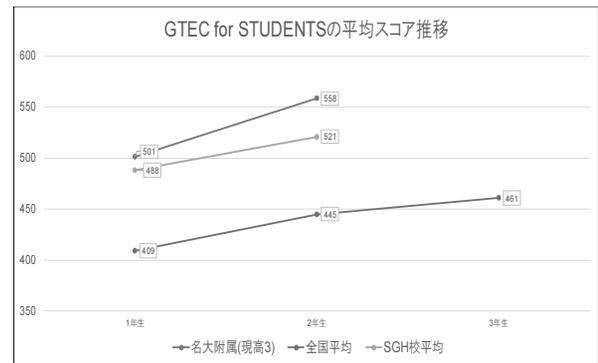
- ①生徒の意識をはかるアンケート：データの収集 中学1年生と高校1年生（4月）
- ②生徒の意識をはかるアンケート：データの収集 中学1年生～高校3年生（12月）
- ③生徒の思考力をはかる記述型課題の実施：高校1年生（4月）
- ④生徒の思考力をはかる記述型課題の実施：高校2年生（3月）
- ⑤英語力調査：中学2年生～高校2年生（GTEC for Students Benesse）
- ⑤生徒学校調査の実施（12月）
- ⑥保護者アンケートの実施（12月）

2 英語力調査

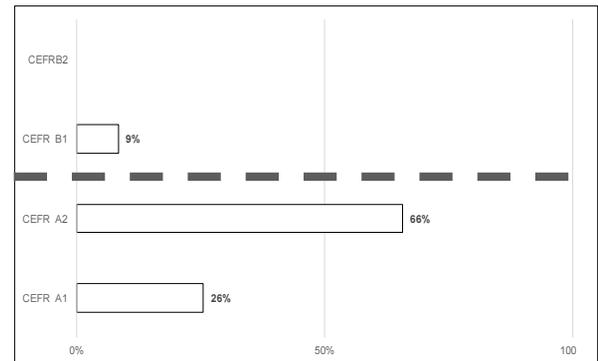
本校では、平成27年度から生徒の英語力を測るためにGTEC for students (Benesse) を実施している。対象学年と試験レベルは以下の通りである。実施は12月上旬である。

学 年	試験レベル
中学2年生 (80名)	CORE
中学3年生 (80名)	BASIC
高校1年生 (120名)	ADVANCE
高校2年生 (120名)	ADVANCE

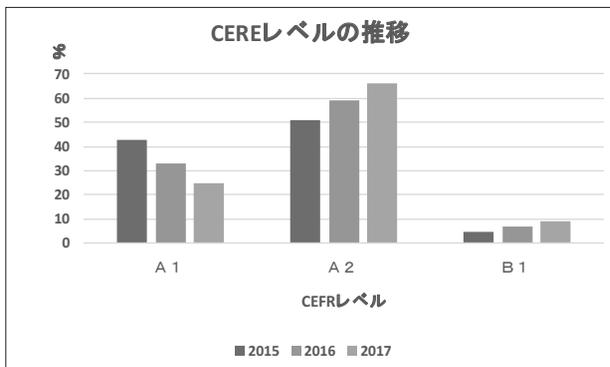
また、下のグラフ1は調査を開始した2015年から今年度2017年度までのCEFRレベルがどのように推移したかを表したものである（対象は高校1年生と2年生の合計約240名）。A1レベルの生徒がだんだん減少し、A2レベルB1レベルの生徒が増えていることがわかる。また、グラフ2は高校2年生に焦点をあて2015年から2017年の変化を調べたものである。B1レベルの生徒が増えていることが見てとれる。GTEC for studentsの指標はCEFLレベルでの表示ではないため、Benesseが作成した換算表を利用した。また、グラフ3とグラフ4は、Benesseに作成していただいたグラフである。グラフ3は、現高校3年生が高校1年のときと高校2年になったときのGTEC for STUDENTSの成績結果を本校、SGH校、SGH校以外で比較したグラフである。本校の得点がSGH校平均よりも高いだけでなく、得点の伸び率も大きいことがわかる。グラフ4は、現高3年生の2年生時30回Advance GTEC for STUDENTSの結果をCEFRに換算分布したものである。赤のライン以上がCEFR B1レベル取得者のパーセンテージである。



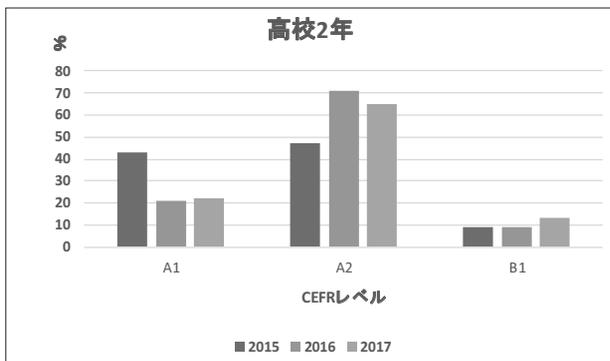
(グラフ3)



(グラフ4)



(グラフ1)



(グラフ2)

GTEC for STUDENTSは、英文法や語法を単純に問う問題ではなく、与えられた英語の情報から、必要なものをスキミングし、与えられた質問に対し自分が得た情報を再構成して回答を導き出すものである。回答時間が短いことも特徴である。英語の力だけでなく情報を読み解く力も必要である。本校がSGHカリキュラムで実施しているALEや Global Discussionが大きく影響していると考えられる。また、通常の授業においても「協同的探究学習」を行っているため、ただ単に「暗記・再生型」の学習法だけではなく「理解・思考型」の学習を取り入れている成果であると考えられる。

次にH29年度のGTEC for STUDENTS B1レベル生徒（高校2年生）とそれ以外に生徒の意識調査結果を比較して分析したのが下の表である。高校1年生はまだB1レベル生徒が少ないため検定を行うことができなかった。また高校3年生も、GTEC for STUDENTS実施が12月であったため受検することができなかったため、高校2年生を検定の対象とした。

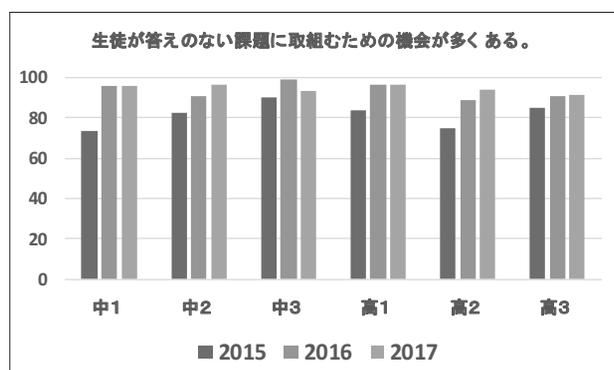
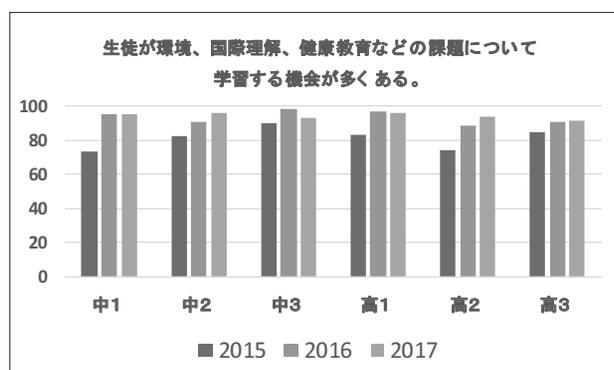
	無				有			T値	有意差	
	n	mean	sd		n	mean	sd			
m_SGH_A	103	3.04	0.95	<	15	3.56	0.98	-1.91	.072	
m_SGH_B	104	3.36	0.99	<	15	4.24	0.76	-4.00	.001	**
m_SGH_C	104	3.11	0.86	<	15	3.76	0.8	-2.91	.009	**
m_SGH_D	101	3.45	0.76	<	14	3.93	0.73	-2.28	.036	*

t検定の結果、Bの力（国際的視野）、Cの力（探究心）、Dの力（判断力）において、CEFL B1レベルの生徒とそれ以外の生徒で、カイ2乗検定を用いて検定した結果、有意差が認められた。

3 保護者評価

本校では、毎年12月に保護者に対して匿名で「学校生活環境調査」というアンケートを実施している。アンケートは、匿名で実施され、保護者が記入後、封筒に封をした後、各学級で回収される。回答方法は5件法で（1.よくあてはまる 2.あてはまる 3.あまりあてはまらない 4.まったくあてはまらない 0.わからない）マークされ、自由記述欄もある。アンケート項目の中でSGHに関係のある質問項目について調査結果を記載する。下記のグラフは2015年度（SGH1年次）からの経年変化である。

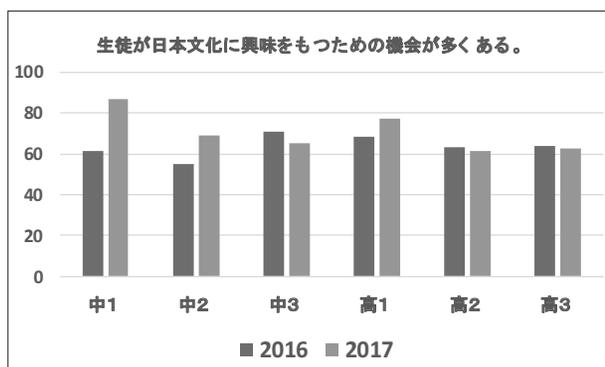
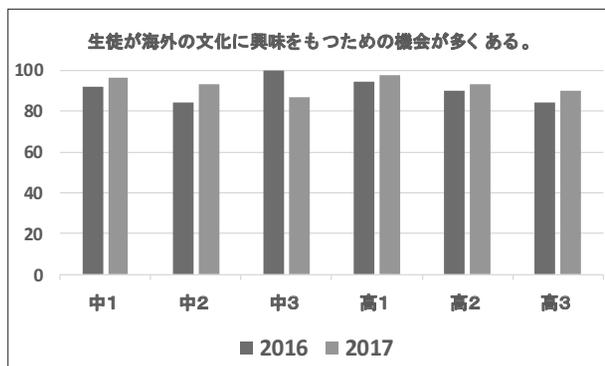
（課題研究に関して）



SGH1年次の2015年度から、多少の増減はあるにしても全体的に毎年グラフが伸びていることがわかる。中学1年生からSGH課題探究を実施しており、全学年において生徒の課題研究発表会を年度末に実施している。この課題研究発表会には多くの保護者も参加し学校とSGH課題研究の成果を共有しているためであると考えている。また、「生徒が答えのない課題に取り組むための機会が多くある」と感じている保護者が、受験期の高校3年生においても高い数値を表していることも特徴である。「暗記・再生」型の受験学習とともに、「理解・思考」型学

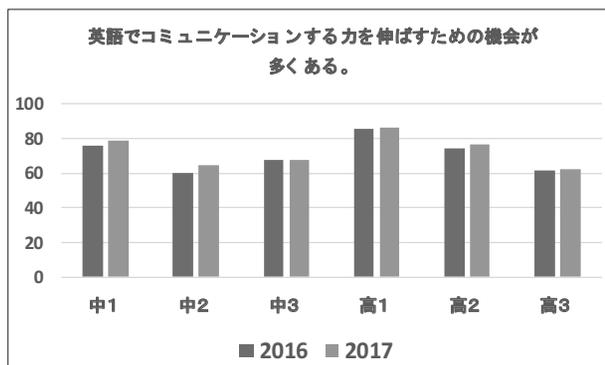
習を重視している本校の教育方針に対して保護者の理解を得られている表れである。

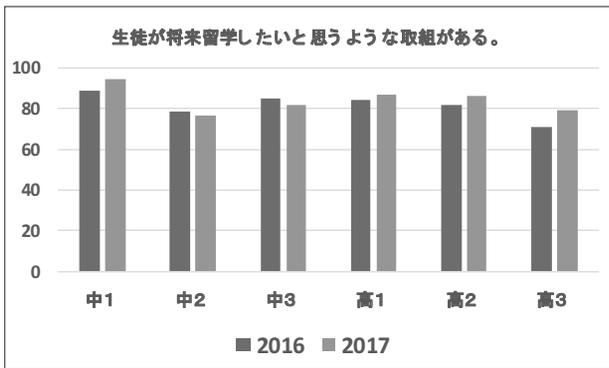
（SGH企画に関して）



「海外の文化に興味をもつための機会」と比較して、「日本文化に興味を持つための機会」が多くないと感じている保護者が多くいることがわかる。海外からの留学生が年間を通して非常にたくさん本校を訪問する（2016年度482名、2017年度293名）ため、校内に留学生がいることが当たり前のことと生徒が感じていると推測する。海外からの留学生に対しては日本文化体験を実施しているが、本校生徒が日本文化体験に参加する機会が多くないことが原因だと考える。今後は、海外からの留学生と一緒に、本校生徒が日本文化を体験する機会を増やすことが課題である。

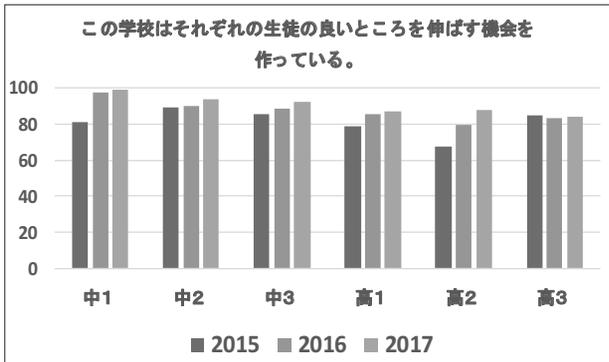
（外国語関係について）





高校1年と2年のグラフの伸びは他学年に比べて高い。「SGH企画に関して」でも記したが、本校には実に多くの留学生が来校する。その度ごとに本校生徒と交流する機会を持つが、その対象となる生徒は高校1年と2年が多い。理由は留学生とコミュニケーションをとることができる英語力である。中学生も交流する機会はあるが、高校生と比較して多くない。それがアンケート結果にでていと分析した。また高校3年生は、交流の機会が、夏前の時期に限られてしまうため、やはり高校1年と2年と比較した場合、大きな伸びは見られない。しかし、このアンケートが保護者アンケートであるという点に着目すると、学校での様子を各家庭で話していることが垣間見られる。

(総合的な評価について)



SGH保護者ボランティアの設立
 2016年度 合計43名 → 2017年度 合計 53名

内容)
 通訳: 英語、中国語、スペイン語、フランス語など
 日本文化紹介: 着付け、書道、生け花、茶道など
 講師: 社会人としての講話など

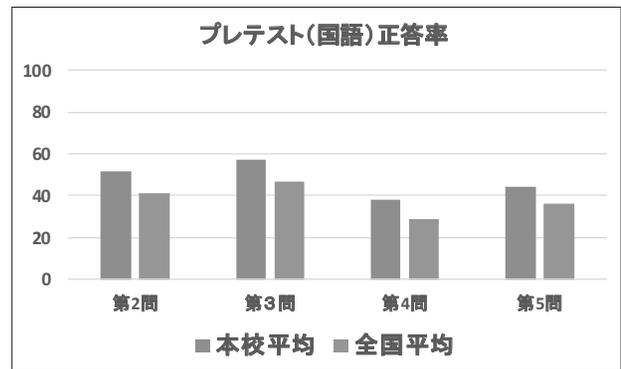
SGH理解・学校教育理解につながる

SGHをスタートした2015年度から、各学年においてグラフが毎年伸びていることがわかる。言い換えれば、保護者の学校に対する満足度が上昇している。これは、SGHを開始したことによる大きな評価であると言える。学校での様子が家庭によく伝わらないという意見を聞く

学校は多い。保護者の満足度が高いということは、結果として学校の教育方針や教育方法を支持・支援して下さる保護者の増加につながる。本校では、SGHを開始してから、「SGH保護者ボランティア制度」を取り入れた。右のスライドは、H30年1月19日(金)に優良事例として「管理機関対象SGH連絡協議会」で発表したスライドの一部である。募集は4月に行う。2016年度に開始した時は43名の保護者が登録して下さった。それが、2017年度には53名に増加した。各言語の通訳、日本文化体験指導・補助などのサポートをしていただいた。今まさに「学校における働き方改革」が問われている中、その先進的な事例としてあげることができる。また、この取組みは保護者の学校理解にもつながるため相乗効果が期待できる。加えてSGH全体への理解を充分されているため、日本全国に対して力強いSGH応援団となっている。またそれが大きな広報活動となることは確かである。

4 高校3年生の思考力・判断力

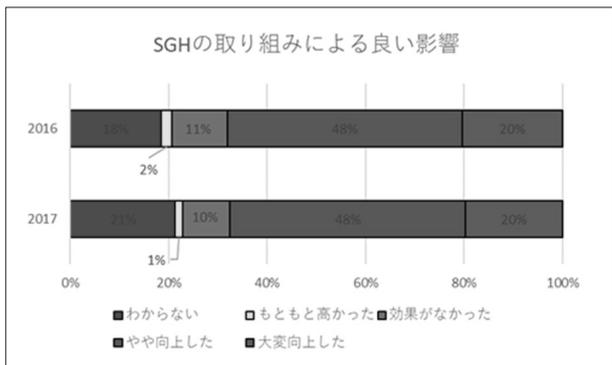
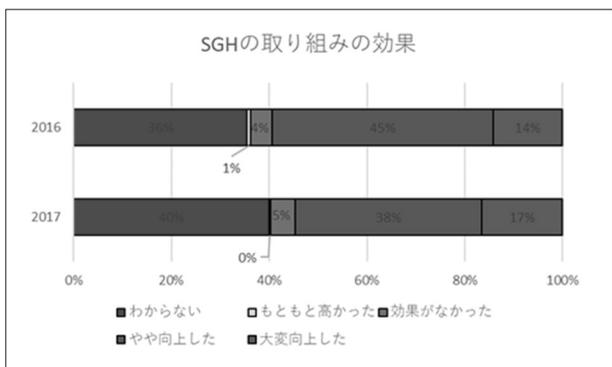
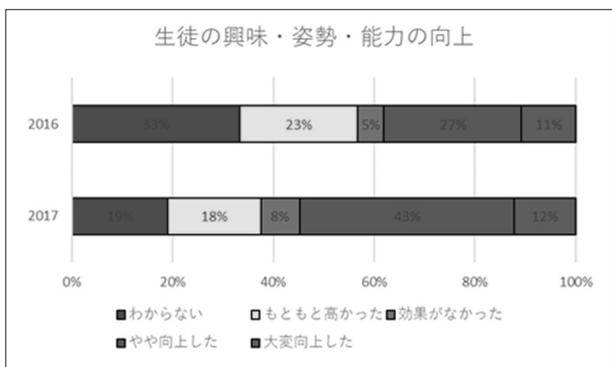
平成32年度から実施を予定している大学入学共通テスト(仮称)の導入に伴い、独立行政法人大学入試センター主催の平成29年11月試行調査(プレテスト)を高校3年生全員を対象に実施(11月16日)した。現在行われているセンター試験とはことなり、「暗記・再生」ではなく、「理解・思考」の力が問われるものである。第1問の記述形式の正答率はまだ返却されていないため第2問から第5問のマーク形式の結果だけ分析した。その結果、すべての大問に関して全国平均を大きく上回っていることがわかった。現高校3年生は、試行調査実施時の11月は、センター試験に向けた学習に励んでいるにもかかわらず、「理解・思考」の力が問われる試行調査(プレテスト)において全国平均を上回る結果が出たということは、本校で実践している教育方法は、今後必要とされる「学力」を育成していることになる。SGH開始とともに入学したSGH1期生の、試行調査(プレテスト)での結果は、本校がSGHで育成する「自立した学習者」に成長していると言える。現在はまだ返却されていないが、記述型の第1問の結果を今後合わせて分析する予定である。



5 教員アンケート

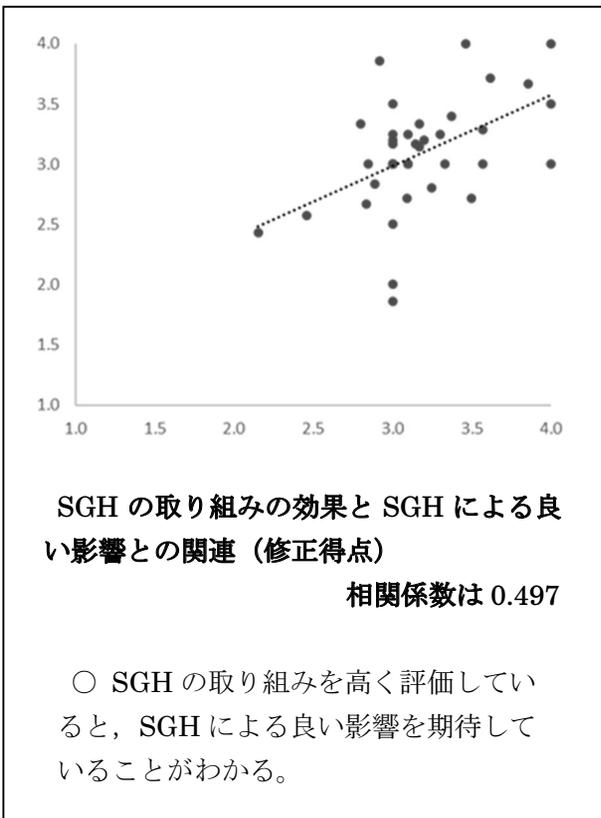
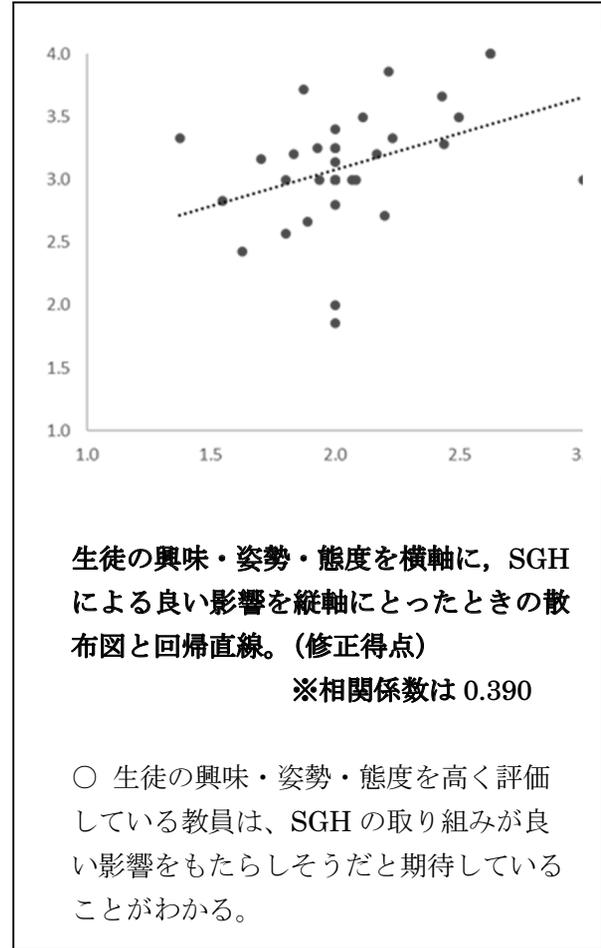
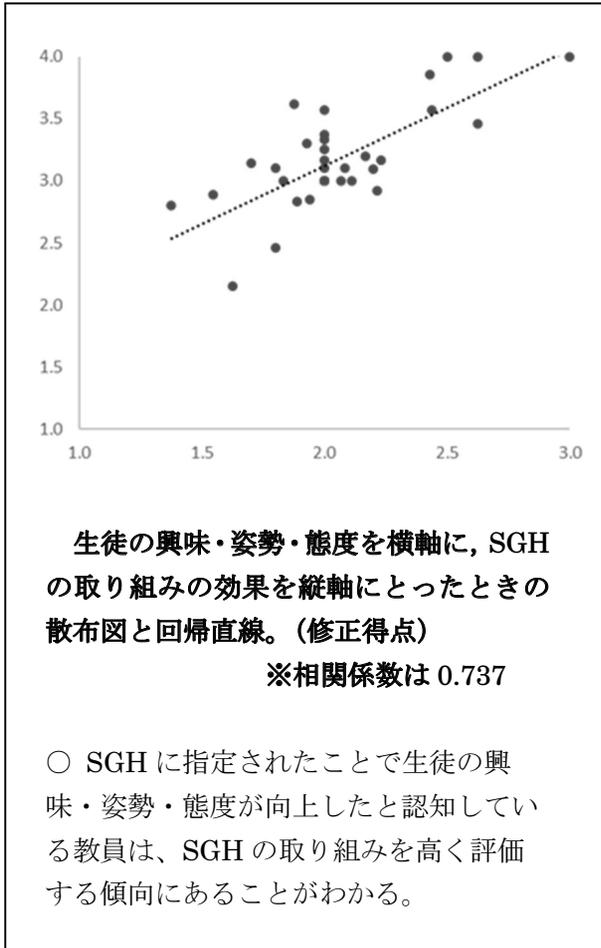
専任教員に対して、H28年度からSGH教員アンケートを実施している。質問項目は大別して3つのカテゴリーに分かれる。今年度はH30年1月に実施した。アンケートの分析は、名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程の赤松大祐さんと協同で行った。H29年度の教員評価の個別区目と結果については、第7節実施の効果とその評価に詳しく示している。

1. SGHに指定されたことで、生徒の興味、姿勢、能力に関わる変化（生徒の興味・姿勢・能力）
2. SGHでの活動が生徒に与える効果（SGH企画への取り組みの効果）
3. 学校のグローバル化に関する先進的な取組（取り組みによるよい影響）



以上3つのグラフは、H28年度と29年度のアンケート調査結果をまとめたものである。教員構成は多少の教員

移動はあったものの数名程度であるため、その点はアンケート集計分析では考慮しなかった。「生徒の興味・姿勢・能力」が向上したと感じている教員が28年度に比べて増えている。併せて「わからない」と感じている教員が減少している。SGH3年目になり、多くの教員が高校での課題研究に関わるようになったためだと分析した。また、「SGH企画への取り組み」が生徒に与える影響に関しても、約半数の教員が効果があると感じている。「SGH企画」とは具体的には、国内研修や海外研修が相当する。研修の企画はSGH推進委員会が中心に行い、実施にあたっては推進委員以外の教員に運営を依頼する。すべての教員がまだ国内研修や海外研修に関わっているわけではないため、研修関係に関わりの薄い教員は、「よくわからない」と感じる。校内での仕事内容によって、SGH国内外研修にすべての教員が関わるのは難しいが、少しずつ研修運営教員を増やしていきたい。また、研修参加生徒の実践報告会を現在より多く開催し、SGH国内外研修研修に直接関わることのない教員が、参加の成果を直接聞くことができる機会を増やしていくことを考えている。「SGH取り組み」が新たなカリキュラム開発や、教員の指導力向上、グローバルリーダーの育成に役立つと多くの教員が感じていることは、「SGH取り組みによるよい影響」の結果からわかる。次の表は、以上3つの各カテゴリーのそれぞれの相関を表した散布図と回帰直線である。「わからない」の回答は分析から除いた。



※相関係数の解釈の目安

- 0.0～0.2 無相関
- 0.2～0.3 ほとんど相関なし
- 0.3～0.4 弱い相関
- 0.4～0.6 中程度の相関
- 0.6～0.8 強い相関
- 0.8～1.0 非常に強い相関

3つの散布図と回帰直線から、実際にSGHに関わることでSGHの効果を感じることがわかる。「課題探究Ⅰ・Ⅱ(研究開発単位Ⅰ)」「協同的探究探究学習(研究開発単位Ⅱ)」の実施に全教員が関わっている。そのため多くの教員がSGHの効果を感じていると分析した。研究開発に関して、教員どうしのコミュニケーションや、教科間でのコミュニケーションが向上することで、新しいカリキュラムの開発や教員間の協力関係など学校運営の改善や強化につながることも、個別アンケート結果から確認することができた。